

第1章 景観計画区域

(1) 碧南市の景色特性

本市の景色特性の整理にあたっては、本市の景色の特徴を際立たせるために、「水と緑に囲まれた潤いを与える景色」、「まちの変化と現在を映す多様な景色」、「歴史や産業、地域の特徴を表す景色」という3つの視点を設けています。

①水と緑に囲まれた潤いを与える景色

「水がかたちづくる骨格」

北部は油ヶ淵、東部は矢作川、西部と南部は衣浦港と周囲を水に囲まれ、これらは地形の骨格となっています。



「地形の変遷を表す大地」

標高*は最も高い地域で11m程度となっており、矢作川の右岸に広がる碧海台地と矢作川沖積地からなる平坦地、衣浦港（衣ヶ浦湾）に面した地域を造成した臨海部に大きく区分されます。



「水辺がつくりだすまとまりと潤い」

矢作川や油ヶ淵をはじめとする河川や湖などは、地域を分けるだけでなく、景色の構成に変化をもたらす「ふちどり」として重要な景色となっています。



「微地形に見る旧海岸線」

旧海岸線や道に沿ってつらなる斜面林、緑地や切り通し*が微地形をなし、魅力的な景色を構成しています。

②まちの変化と現在を映す多様な景色



「農業がつくる田園の景色」

東部を流れる矢作川は現在の流れではなく、東側は古くは海で入江を形成し、油ヶ淵は海に接する最も大きな入江となっていました。江戸時代に、開削により矢作川が流入するようになると、運ばれてきた砂により浅瀬となり、新田開発が行なわれ、広大な農地が形成されました。現在、県内でも有数の農作物の生産地として、田園やにんじん畑などは、「まとまり」のある景色となっています。



「工業・漁業がつくる活力ある景色」

臨海部は、昭和 32 年に衣浦港が国の重要港湾の指定を受け、臨海工業地帯として発展しました。ボードウォーク、新川港や大浜漁港と発電所をはじめとする様々な工場や船舶などを眺めることができ、「みはらし」を演出する重要な視点場※の役割を担っています。



「商業がつくるにぎわいある景色」

江戸時代、大浜湊などは江戸への海上交通の要衝となる港町として繁栄しました。その後、名鉄三河線の開通に伴い駅周辺に商業施設が立地し、地域に密着した商店街が形成されました。また、地域の特色を活かしたイベント等が行われにぎわいを演出している一方、近年は幹線道路沿いの郊外に商業施設が多く立地してきています。



「歴史が育んだそれぞれの地域の顔」

本市は合併により市街地が拡大していくなかで、それぞれの地域で、時代の流れとともに育まれた住宅地として「まとまり」のある景色が形成されてきました。なかには黒壁や板壁を基調とした古くから続く建築様式も見られる一方、近年は建築物の外装など多様化しています。



「名鉄三河線の走る景色」

本市と高浜市、刈谷市、知立市をつなぐ名鉄三河線は、本市の軸となる重要な景色となっています。碧南駅から吉良吉田駅は廃線となってしまいましたが、平成 30 年にオープンした、碧南レールパークが昔の景色を思い起こさせます。また、名鉄三河線の鉄道駅周辺は、本市の都市拠点として古くから栄えた商店街が見られます。

③歴史や産業、地域の特徴を表す景色



「市内に点在する寺社」

鎌倉時代にはじまった新仏教により、多くの寺社が見られます。



「歴史を物語る建造物」

江戸時代中期には大浜湊などの港を拠点として醸造業や窯業が栄え、現在も九重味淋などの味噌・味醂工場や酒屋といった江戸時代以降の歴史的建造物、旧衣浦温泉や旧大浜警察署といった近代の歴史的建造物なども残り、「めじるし」となる景色となっています。



「コミュニティがつくるまちなみ」

歴史的建造物を囲い、「ふちどり」や「まとまり」の役割を果たしている黒壁や板壁のつらなり、路地や坂道は、本市の特徴として魅力的な景色となっています。



「暮らしに根づいた歴史的資源」

常夜燈、地蔵や碑といった「めじるし」となる歴史的な景色の資源も多く残っています。

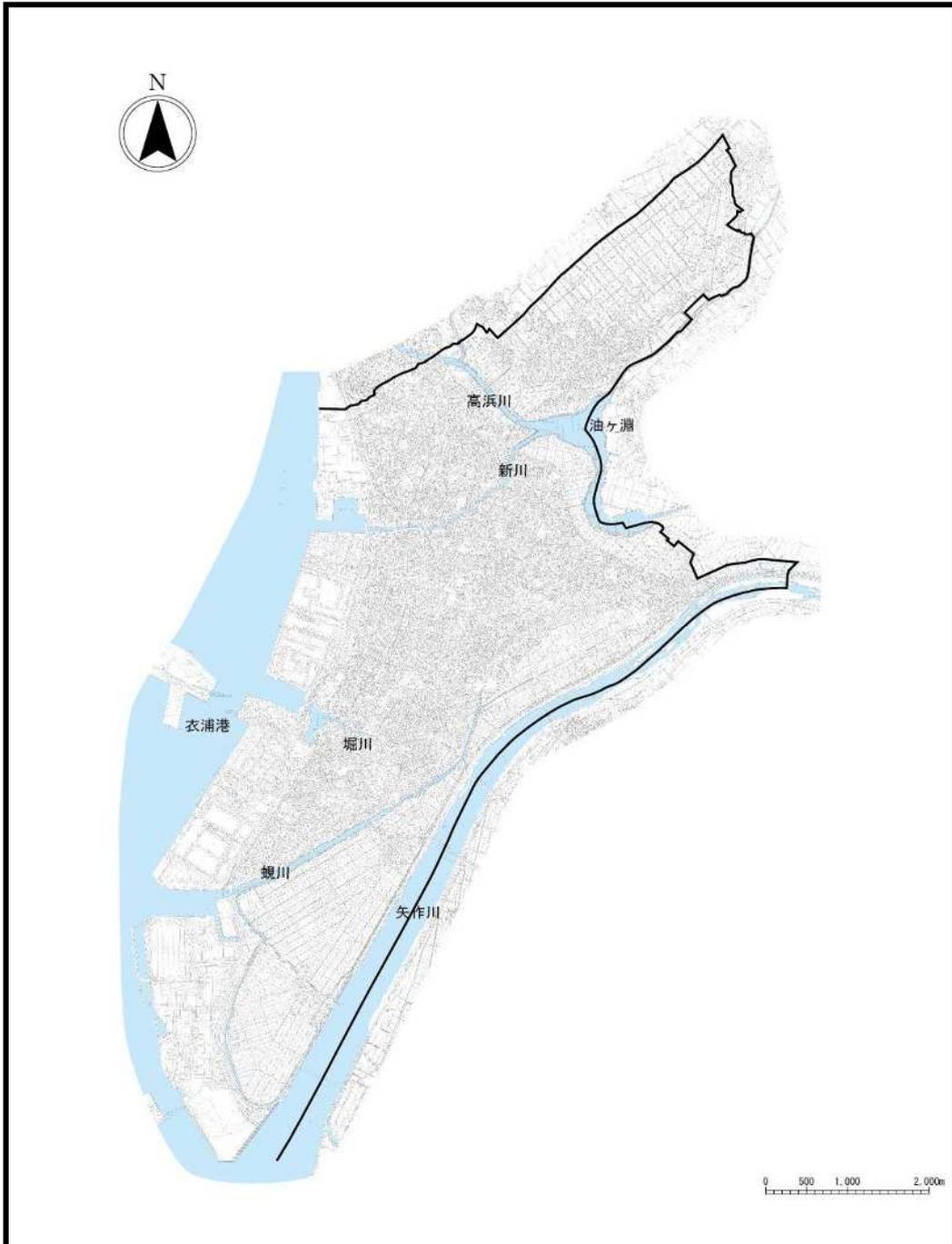


碧南市の景色特性

(2) 景観計画区域

本市は、「碧南市景色づくり基本計画」に基づいて、市全域を対象に様々な景色づくりに取り組んできました。

このような現状や経緯を踏まえて、引き続き市全域に広がる様々な景色資源と調和した景色づくりが必要であると考え、市全域を景観法に基づく景観計画の区域（以下「景観計画区域」という。）とします。



景観計画区域